別紙様式第４

学　位　論　文　要　旨

博士課程 甲・乙	第　　号	氏　名	明野　慶子

［論文題名］

Cerclage in surgically shortened uterine cervix and pregnancy outcome:
A retrospective comparison between the abdominal and vaginal procedures

経腹的・経腟的子宮頸管縫縮術に関する後方視的研究

［要　旨］

The Journal of Obstetrics and Gynaecology Research, accepted, 6ページ, 2022,
DOI: 10.1111/jog.15428

【背景】子宮頸管無力症に対して施行される子宮頸管縫縮術には経腹法と経腟法があり、経腹法は子宮頸部の短縮や裂傷により経腟法が困難な症例が適応となる。若年女性に子宮頸部異形成や子宮頸癌が増加してきており、治療として子宮頸部円錐切除術を施行された後の妊娠では、切除体積が大きいほど流早産率が上昇すると言われている。先行妊娠で流早産に至った症例を対象とする経腹法と経腟法の比較研究は行われているが、子宮頸部円錐切除術後の症例を対象とした報告は少ない。本研究では、子宮頸部円錐切除術後の妊娠における経腹法と経腟法の比較検討を行う。

【目的】子宮頸部円錐切除術後の妊娠症例における経腹法と経腟法の比較検討を行い、予後や予後にかかわる因子を明らかにする。

【方法】2008年から2020年までに宮崎大学医学部附属病院で管理した子宮頸部円錐切除術後の子宮頸管縫縮術施行症例（経腹法14例、経腟法18例）を対象とし、後方視的二群間比較研究を行った。母体情報および新生児情報について統計学的解析を行った。

【結果】　術前の子宮頸管長の中央値は、経腹群20.0mm、経腟群31.0mmであり、経腹群で有意に短かった($p < 0.01$)。また、術前の腟分泌物培養は、経腹群でGardnerella陽性例が多い傾向にあった($p = 0.073$)。37週未満の早産率に有意差は認めなかった。非劣性重回帰分析では、経腹法は子宮頸管長の有意な短縮を認めるものの、経腟法と比べ分娩時妊娠週数に有意差は認めなかった。

【結論】子宮頸部の短縮などで経腟法が困難な症例に対しても、経腹法を施行することで同等の予後が得られた。

備考　論文要旨は、和文にあっては2，000字程度、英文にあっては1，200語程度